

## 躍進する名古屋大学の力となるために ～留学生センター相談室（204号室）活動報告～

田 中 京 子 ・ 柴 垣 史

### はじめに

2004年度に法人化した名古屋大学はこれまでも増して、地域社会や国際社会で核となり貢献することを意識しながら研究・教育活動を行っている。その中で、研究や教育、組織そのものの国際化が重要な位置を占めており、留学生センターがこれまで蓄積してきた知識や経験が求められ活かせる場面が多くなってきている。

2005年は愛知万博開催の年でもあり、地域がより世界を身近に意識する環境も後押しし、留学生が様々なイベント、異文化交流プログラムにおいて地域の人々との関係をより多く築き、地域と世界を繋ぐ掛け橋として大きな役割を担った年でもあった。

オリエンテーション、ワークショップや日々の相談活動を通じた学生の教育、生活支援を着実に進むとともに、学内や地域の国際化に生かすために学内外委員会等での活動を継続して行った。相談室204号室は引き続き田中と柴垣が担当し、新たな発想を心がけながら、専任教員が着任した全学の留学生相談室や関係部門と連携しながら、教育活動を行った。

### 1. オリエンテーション：情報提供、信頼関係構築、交流促進

留学生の渡日前から修了後に至るまでの参加型、交流型、日本語・英語併用型オリエンテーションを継続、充実させた。

#### (1) 渡日前オリエンテーション（留学生センター所属学生対象）

新入予定の学生が、渡日前から留学生センターのスタッフや学生たちと交流して信頼関係を築いていけるよう、事務室との協力で渡日前情報を作成、郵送した。同内容を電子メールでも発信し、その後新入予定者、学生、スタッフ等が互いに連絡を取り合った。情報の

中には、その期の情報提供者として登録した在学留学生のリスト及び彼らからの渡日にあたってのアドバイスを含めた。多くの新入学生にとって、渡日時には既に名古屋大学のスタッフや学生の中に連絡を取り合っている知り合いがいる、という状態になった。

#### (2) 到着後オリエンテーション（留学生センター所属学生対象）

新入生には、彼らの名古屋到着時に、留学生センターからの歓迎メッセージとその後の予定を記したパンフレットを、宿舎で待つ ACE（Action group for Cross-cultural Exchange）から手渡した。到着翌日（平日）には、地域ボランティアの協力により区役所で外国人登録と国民健康保険・国民年金加入を行い、この手続きの際使用した新入学生の氏名のカタカナ表記を、ボランティアメンバーがファックスで留学生センターに送付するという方法を続けた。これにより、その後大学で使用するカタカナ表記が、健康保険等に使用する表記と統一できるようになった。

後日留学生センターでオリエンテーションを行った。留学生センターオリエンテーションは、事務室による書類記入、日本語教育メディア・システム開発部門によるコンピュータ室使用説明、相談室による生活関係の説明、日本語コースについての説明を、部門間で協力して行った。

#### (3) ワorkshop型オリエンテーション（全学学生対象）（資料1/2）

今年度は、前期は、日本文化紹介の導入として茶道のワークショップを、また主に大学宿舎退去予定者のために引越しについての説明会のみを行ない、その他を準備期間とした。後期には、名古屋大学全学同窓会支援による特別セッションを取り入れ、様々なプログラムを編成してワークショップを行なった。

今年度のワークショップの特徴としては、

- ・前年度同様、学生の授業時間に配慮し、引越し及び地震のワークショップ以外は、通常授業のない時期に時間設定した。
- ・地震についてのワークショップは、今年度も災害対策室との連携により行なった。同室が編成する全学向け防災マニュアルの英語版（試作）をセッションで使用するにより、留学生にとってよりわかりやすい資料の作成に寄与した。
- ・名古屋大学全学同窓会から支援費40万円を受給し、グローバルに活躍できる人材の育成を目的とした

- セッションを2回開催した。1回目は同窓生を招き、パネルディスカッションを、2回目は、これからの就職活動を意識し、名古屋大学同窓生でもあるビジネス教育研修のインストラクターを招き、日本のビジネスマナーを講義と演習で学ぶ機会とした。
- ・講師の交通費や材料費、通訳への謝礼の一部支出について、3万円を限度に、留学生後援会からの留学生センター支援金が使えらることになった。また、これまではボランティア講師に準備していただいていた書道の道具等のうち、今後にも必要になる物の一部をセンター経費から購入した。

開催日	トピック	講師	通訳	参加者数（約）
7/12	茶道（日本の習慣）	蛭子琴枝（茶道裏千家）	ジャナシルティ・セート（留学生の家族）	30名
7/19	引越し	松浦まち子（留学生センター）		20名
10/22	グローバルに仕事を するとは？（全学同窓会支援事業）	パネリスト：同窓生（元留学生） 4名	リトゥ・コーチャル（国際言語文化研究科）	35名
11/15	地震が来る？	飛田 潤（災害対策室）柴垣・田中（留学生センター）	ラジャディーブ・セート（国際言語文化研究科）	30名
1/20	引越し	松浦まち子（留学生センター）		20名
2/7	書道	藤井尚美（藤井書道教室）	リトゥ・コーチャル（国際言語文化研究科）	20名
2/28	着物	加藤かつ子（駒着物学苑）	リトゥ・コーチャル	25名
3/14	ビジネスマナー（全学同窓会支援事業）	山崎直美（オフィス・ブルージェ）	リトゥ・コーチャル	20名
				（計200名）

日本人学生や外国人研究者、留学生の家族といった様々な身分の人が参加することによって、交流のきっかけともなるオリエンテーションをめざした。また、言語習得度の異なる人々が参加できるよう、すべてのオリエンテーションを日本語・英語併用で行い、資料もすべて二言語で作成した。茶道、書道、着物は人気のあるトピックスとして定着してきており、講師の方々も回を追うごとに、より多彩に魅力あるプログラムを構成してくださっている。

準備期間を取ることで、無理のないプログラム編成、各セッションの内容充実が可能となったが、1時間半という時間内での日本語・英語併用によるセッションは、講師から参加者への講義、デモンストレーションという一方通行の形になる傾向がみられる。講師への

質問や、参加者同士の意見交換、またセッション内で自己を開放できる余裕をプログラムに取り入れることは重要である。次年度のプログラム構成、各セッションの進め方については、このことを意識し、より発展したワークショップの提供を考えていきたい。

#### (4) ホームページ・電子メールによるオリエンテーション（留学生センター所属学生）

相談室からの情報提供等は電子メールも使用して行ってきた。事務・生活情報を適宜発信し、修了後にも手続き関係の情報、今後の協力願い、などを発信し電子メールの利便性を活用した。電子メールによる情報提供においては、そのコピーを留学生センター内の各自のメールボックスにも配付するようにした。

留学生センター全体のホームページが新しく整備されたことにより、情報を提供する側も受け取る側もより見やすい構成となった。留学生センター相談室としても情報内容の更新、内容の拡充について、今後も積極的に協力していきたい。

## 2. 学生個別教育：相談

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生に限らず、在学生や他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談に対応した。結果として、多面的に名古屋大学および地域の国際化進展に貢献することをめざした。

### (1) 相談時間

今年度は全学委員会への出席が多かったため時間を確定せず、週に7コマから8コマ（1コマ=90分）の相談時間をその都度掲示するようにした。その他の時間も可能な時には開室して相談に応じた。

### (2) 相談件数

相談室のホームページを見てメールで留学相談や生活相談を発信する人は依然として多いが、国際課や各部署のホームページがより充実してきたため、直接担当部署に問い合わせることが多くなったのか、昨年より入学に関する問い合わせが減った。（記録できなかった日もあるため、全体の相談件数としては例年とほぼ同じだと思われる。）

#### 合計

	日本語研修生	日本語・日本文化研修生	短期留学生	他学部留学生	他大学留学生	その他	合計
指導教官	2	0	0	3	1	0	6
勉強	9	4	1	18	11	75	118
帰国・一時帰国	4	1	0	3	0	0	8
入国・在留	0	0	0	6	1	1	8
事務手続き	37	2	0	38	8	10	95
医療・健康	4	4	0	21	3	5	37
家族	22	0	0	29	23	11	85
宿舍	91	0	1	75	10	35	212
適応	0	5	0	3	1	5	14
経済	4	0	0	18	17	0	39
地域交流	4	3	0	17	1	32	57
仕事・アルバイト	1	4	4	20	2	27	58
旅行・クラブ・趣味	11	0	0	11	11	17	50
電話	0	0	0	0	0	0	0
インターネット	0	0	0	7	0	0	7
その他	6	0	0	16	3	14	39
合計	195	23	6	285	92	232	833

E-mail	324
来訪 / TEL	509
	833

### (3) 相談内容

#### ◆勉学・研究

母語が英語ではない留学生は、日本人学生同様英語力を高めることに強い関心があり、国際言語文化研究科で開講している英語授業受講に関する問い合わせが複数あった。入学時期や情報収集時期の遅れから受講手続きに間に合わず受講をあきらめる学生もいるが、潜在的にはかなり多くの学生が受講を希望していると思われる。ゲスト参加を受け入れる教員もいるが、留学生が正式に参加することによって参加学生すべてに与える影響も考えると、今後国際言語文化研究科に伝えていくべき事項だと思う。

取得単位についての認識不足から、修了数ヶ月前に単位不足がわかり修了できなかった国費学生がいた。また、研究成果が十分でないことがやはり修了間近になってわかり、私費での滞在を余儀なくされた学生もいた。国費学生の場合奨学金の延長はなく、帰国旅費の期間延長もないため、期限内に修了しないと経済的にも大きな負担となることを各学生が認識し早めに対処する必要がある。関わるスタッフなど周りの人々もこの点について、機会あるごとに学生の認識を促す必要がある。

今年度田中は研究生を1名担当した。本人が希望する研究分野を進められるよう、可能な限りの指導をし、一定の成果があげられたと思う。事務的には、当学生が日本では日本国籍、母国では二重国籍を持っていたことから、進学手続きの際などに混乱があった。入学試験の際には「外国人学生用」の試験を受けるが、身分上は留学生としての資格がないことなど、制度の細部に関わる誤解等である。世界を舞台に仕事をし生活する人々が増える中、パスポートの国籍と、生まれ育った国、アイデンティティーがある国、などが必ずしも一致しない例が日本でも今後増えてくるであろうことを、心に留めたい。

留学生センター相談室がインターネット上にホームページを開設していることから、入学に関する電子メールでの問い合わせが多くあった。また数年前ペルーの元日本留学生の同窓会誌に田中が執筆した記事がインターネット上に公開されているため、これを見て問い合わせをするスペイン語圏の留学希望者が多く、電子メールによる相談件数は依然として多い。しかし様々な形や内容で寄せられるすべての問い合わせに丁寧に対応する時間的余裕はない。メールアドレス

を公表することに伴って、相談員には瞬時の判断力と時間管理が求められている。

#### ◆入国、在留

名古屋大学卒業または修了後に日本で就職活動を希望する学生がおり、就職活動で認められる在留資格やその期間、実際の活動のあり方についてアドバイスを求められるケースがあった。

家族呼び寄せについては出身国や家族状況によって査証発行の条件が様々であり、必ずしも前例が通用するとは限らない。相談室としては、友人や先輩など過去の事例を参考にして入国・家族呼び寄せを計画しがちな留学生に、制度や審査基準が常に変更するものであることを伝えるようにしている。

#### ◆事務手続き

市・県民税や国民年金について役所から書類を受け取ってその処理について相談に来る学生は多い。税金についても国民年金についても、住民としての自覚を持ち、できることは実行するようにしているが、書類の内容についての説明や記入の援助などには知識や時間が必要である。関係機関と連携しながら進めていきたい。

#### ◆医療・健康

成長過程にいる学生たちは、異文化の中では普段にも増して精神的に発達する可能性を持ち、同時に不安定になりうる要素も持つと言える。留学したことは自信にもつながると同時に自分への失敗が許せないプレッシャーともなり得る。数名の学生たちがそのような不安定さを強く経験したが、友人や教員たちとの協力でのりきった。

数年前から病気と闘ってきた学生が、母国での治療に希望を託して帰国し、一時は快復するかとみえたが数ヶ月後に亡くなった。若い学生の病気や死は家族にとっても知人友人たちにとっても非常につらい。同期に入学した学生たちに知らせ、悲しみを分かち合い、また支援してきた人々に感謝の気持ちを伝えた。

自転車に乗っていて事故に遭い大怪我をして、完治までに1年かかる例があった。保険交渉は精神的・時間的負担が大きく、怪我の苦しみと重なってつらい時期を過ごした。また、学生が自転車で歩行者にぶつかって加害者になるというケースもあった。学生本人、松浦教授、留学生センター事務員が誠意をもって謝罪・対応し、被害者も理解を示してくれた。幸い怪我は早期に快復し大事に至らなかったが、ブレーキがきかな

い自転車に乗ることの危険、ゆるやかな坂を速度をあげて乗ることの危険について、今後も学生たちへの注意が必要である。

#### ◆家族

家族と同居を始めたが、時間的経済的に自分の能力範囲を超え、その結果自らも苦勞をし、また周りへも負担をかけてしてしまう学生があった。国費受給者にとっても家族との同居は経済的には厳しいことが多い。自国での生活水準や生活スタイルを続けることが困難であり、借金や支援を頼るのを当然視することができないことを、家族渡日前に十分認識する必要がある。良し悪しは別としても、「それぞれの力の範囲でつましく」「周りに迷惑をかけず」生活することが日本では大切にされていることを伝えるようにしている。

一方、学内保育園設置へ向けて様々な作業が続き、2006年4月開園が実現されることになった。保育料から考えると留学生の子ども利用は難しいが、学内の国際化を反映した保育が実践されるよう、これまで相談に応じてきた経験を伝えていきたい。

出産育児についての相談は家族呼び寄せと共に多い。これについても経済的な基盤を持ち安心して出産育児できるような環境を整えるためのアドバイスをしてきた。

#### ◆宿舎

民間アパート家賃等の支払い方法に関して、契約内容の理解が不十分であったことや、契約者としての支払い義務そのものに関する認識のずれから、支払い遅延が習慣化しているケースが数例あった。契約内容を再度よく読み、家賃の支払い期日について学生に確認するなどした。また、思わぬ出費や奨学金の遅れで家賃支払いが期日までにできない、と相談に来る学生がいる。家賃は必ず期限までに支払うこと、またそのような場合を予測して、常に余裕を持って家計を管理することが大切であると伝えている。

家主側が何か疑問や問題を感じた時にはいつでも学生本人に、難しい場合は相談室にも相談できるような信頼関係を築くことを第一とし、文化差から誤解があるような場合には仲介者として双方の理解を促すよう努めた。しかし言語の壁もあって、双方が直接意思疎通をはかるのが難しいと感じられるのであろう、相談室で扱う相談は非常に小さなことから大きなことまであり、宿舎関係の相談に使う業務時間はかなり多い。

今後の検討課題である。

10年以上前に留学生センターに在籍した留学生（現在研究員）と当時から親交のあった建設会社の社長が、建設したアパートを留学生のためにと提供してくださった。留学生にとっての住宅探しの難しさを元留学生から聞いており、建設に至ったとのことである。Mehrban Honshu（メヘルバンとはベルシャ語で、長期にわたる頼もしい支援の意味。本州建設㈱が建設した）と名づけられたこのアパートに、2006年4月から一期生が住み始めている。ご好意をよい形で受け取れるよう、相談室も今後の展開に協力していきたい。

#### ◆適応

成長過程にある学生たちが留学の中でカルチャーショックを経験するのはごく自然のことである。それを意識しつつ、本人が自力で乗り越え成長の糧とできるか、周りの人々の支援を必要としているか、または専門家の支援が必要かどうか、それを見極めることが相談室の役割と考えて数例に対応した。

#### ◆経済

授業料免除が受けられない、奨学金が得られないなどの状況で、経済的に苦境にたつ学生からの相談は依然として多い。「授業料は支払うものである」という基本にたち、経済的に自立するための方策を共に考え、場合によっては休学帰国や中途退学の可能性を検討することもある。一方で、優秀な学生たちに大学独自の奨学金を創設することが、引き続き求められている。苦勞しながら数年を過ごし、学位を取得して帰国する学生には、その忍耐強い努力に敬意を示すと共に、周りの大きな支援に負うところも多いことを理解するよう伝えている。

#### ◆地域交流

2005年3月から9月まで万国博覧会「愛地球博」が愛知県を会場に開催された。世界の多くの国々がパビリオンを出し催しを行なう中で、関連する行事に留学生の参加協力を依頼されることが多くあった。また、博覧会を機会に生涯学習センター等で国際理解・国際交流の講座が開催されることも多かった。愛知県全体で国際交流への意識が盛り上がった。

教員研修生として名古屋大学で学び、母国へ帰国して10年近くなる同窓生の一人から、名古屋へ再来する機会に折り紙教育の研修を受けたいという相談があった。母国の大学や学校で自身が担当している日本文化講座の一環として折り紙教育をとり入れたいというこ

とであった。名古屋大学工学研究科でボランティアで折り紙講座を続けて行っている講師の方たちに数回研修をお願いすることができ、工学研究科の国際交流室を会場に使わせていただいた。大学が交流のきっかけとなって同窓生と地域とがつながり、広がっていくひとつ例であった。

全学の「留学生相談室」が中心となって地域交流をコーディネートするようになり、留学生センター相談室も連携を深めていくことができた。

#### ◆仕事・アルバイト

教育交流部門で初めて就職に関するワークショップを行なった。全学同窓会の支援を受けて「グローバルに仕事をするとは？」というパネルディスカッションとワークショップを、その後、学生相談総合センターから紹介を受けた専門の講師による「ビジネスマナー」のワークショップを行なった（詳細は別項報告参照）。留学の出口である就職については最近の大きな課題となっているが、当留学生センターも今後この取り組みを展開していく必要がある。

アルバイトなどで履歴書を提出する際、市販で入手可能な履歴書に記入する留学生も多い。その場合の記入方法や、どのような情報を書くべきかの相談を複数受けた。その際、封筒の使い方、提出にあたってのマナーなど、同時にアドバイスしてきた。

#### ◆電話・インターネット

インターネットが普及し、学生たちの生活にも欠かせないものとなっている。サービス加入や解約に関する相談件数は少なくなったが、オンライン上で見えない相手と売買交渉する学生が増えており、これに関する相談が増えている。注文の仕方を間違えたがキャンセル方法がわからない、現物を見ていないがどう思うか等の相談や、深刻な場合には何十万円もの現金で購入したものが盗難品だったという事件もあった。

コンピュータなど学生生活に必要な物や帰国後の生活に役立つ物を少しでも安価に購入したいという気持ちだが、サービスを安易に利用することにつながりがちである。留学生の中には「日本では信用してよいと思った」という声があるが、残念ながらどんな場所でも詐欺はあり、自己防衛が必須であることを伝えると共に、問題を未然に防ぐためにも消費者としての自覚と責任を持つ大切さを認識するよう伝えている。

#### ◆旅行・クラブ・趣味

クラブについての学生たちの興味は大きい。年度初

めに集めたクラブ・サークル紹介チラシ等の情報をファイルし希望者には閲覧してもらい、各サークルへの連絡・参加は自己の責任において行なってもらった。連絡先へコンタクトしても返事がない、言葉の問題からうまく意思が伝えられないなどの場合には最初のきっかけをつかむ補助も時には必要となった。

#### ◆その他

ムスリムの学生たちからハラール食の提供、金曜集会の場所、イスラーム研究会の発足について相談があった。これまでも同様の相談は個人的にまたは単発的であったが、今回は、名古屋大学で4年間の研究を終えた学生が自分の経験をもとに系統立てて伝え、それを後輩たちにもつないだものであった。これについては次項で別に報告する。

学生によって保護された子猫が相談室に持ち込まれたことがあった。公的機関での動物保護依頼が最終手段となることを学生には説明したが、幸い子猫は、ホームステイプログラムで多くの学生を迎えてくださっている親子に引き取られた。このことは相談室、相談員個人レベルにおいても、ネットワークの広さ、強さの重要性を再認識し、多くの方々の多方面にわたる支援を改めて感謝する機会となった。里親となってくださった方は、留学生の優しい気持ちに触れ、繋がれたその小さな命を大切にしてくださっている。

地域の治安が問題になっている。名古屋でのひったくりや強盗事件は後をたたず、名古屋大学付近でも繰り返し事件が起きているため、学生たちに注意を喚起している。学生のアパートに不審者が訪問した後、ドア横に印がをつけてあった（「マーキング」と言われる犯行の手口の可能性がある）という事件があった。警察にも知らせて、注意して過ごすようにした。

## 【ムスリム学生たちと築くキャンパスの多文化環境について】

名古屋大学にはムスリム人口が100名以上いると思われる。最近ではムスリム人口が多い国々と研究協力をするプロジェクトも学内にあり、多くの学生や研究者がイスラーム圏から来学している。ムスリム、非ムスリムの構成員たちが共に研究や仕事を進め、快適な環境で生活していくには、互いの生活文化を知り尊重していくことが重要である。

### 1. ハラル食

ムスリム学生の中には、ハラル食の規則を遵守している学生や、規則を比較的柔軟に解釈・適用している学生など様々いるようであるが、食堂でのメニュー選びに苦労しているのは皆同様である。もちろんそれぞれの学生が、弁当を持参したり限られたメニューの中で食事を選んだりして、工夫して食生活を維持している。しかし研究・生活時間の都合から食堂を頻繁に利用したい学生もあり、ハラル食提供は彼らの研究生活を安定させるために大きな意味を持つ。

ムスリム学生たちから名古屋大学の食堂でのハラル食提供について相談があったので、留学生センター相談室では彼らにその必要性や内容についてレポートを作成してもらい、それを土台に、名古屋大学で多くの学生が頻繁に利用している「フレンドリー南部」生協食堂の店長と、ムスリム学生の代表たちと、留学生センター相談室が、数回にわたり話し合いの機会を持った。大阪大学の生協が、学生たちと留学生センタースタッフと話し合いを進めた結果ハラル食提供を始めて10年以上になるという報告<sup>\*1</sup>があり、この前例も参考にしながら、話し合いを進めた。

話し合いの中で明確になったのは、学生たちにとって最も負担になっているのは、ハラル食が少ないことよりも、「ある食品がハラルかどうかを確かめる」作業であることがわかった。人混みの中で、忙しい食堂スタッフに食品原料や食堂の調理体制について尋ねるのは心苦しく、結局はつきり分からないものは口にしない、ということになる。この点がはっきりすれば、たとえハラル肉などが提供されていなくとも、他の食品が安心して食べられるのである。生協の配慮で、2005年6月から、調理の際の揚げ物は肉と魚・野菜は別々の油で揚げること、調理醬油にはアルコールが含まれていないものを使うことが実現した。そしてムスリムにも適するメニューには「これはハラル食です」という札がつけられるようになった。食堂利用者すべてがこの札について理解できるよう、食堂の入り口や掲示板にはハラル食についての説明が掲示された。掲示作成などについて、相談室も協力した。学内で共に学ぶムスリム学生たちの食生活について他の学生たちも学ぶことができるよい機会となった。

ハラル肉導入に関しても、学生たちの案内で店長が既にハラル食店を訪ね情報収集を始めており、ムスリム学生への食事提供に関する配慮は、徐々に進展をみせている。人間の生活にとって基本的な「食」について、多様な文化を持つ学生たちを意識した取り組みである。

学内にはベジタリアンも多い。彼らにとっても学内での食生活は課題になっているようで、「自分が料理担当するのでベジタリアン用の食事を出してください」という学生もあった。今後の課題であろう。

### 2. 金曜集会

金曜集会は、知識者の講和を聞き、祈り、生活の情報交換をする、ムスリムにとって大切な行事である。このため金曜の午後はモスクへ出かけ、授業を中断せざるを得なかった学生がこれまで多かった。研究に支障をきたさずにこれが実現できるよう、集会が持てる場所が学内にほしいという希望は以前からあった。特定の宗教について大学が公的に場所を提供することについては問題もあるようで合意が得られていない。このため、宗教の祈りのためだけでなく、学内ムスリムの情報交換と研究集会という位置づけを明確にし、インターナショナルレジデンスの集会室に使用を申請するようになった。大学構成員なら非ムスリムであっても誰でも参加できる状態にし、他の多くのグループと同様開かれた集会としている。

その後、場所使用の方法や後片付けについて関係者や事務室スタッフから助言を受けながら、金曜集会が続けられている<sup>\*2</sup>。

### 3. イスラーム文化研究会

イスラームについて昨今生じがちな偏見をなくし、平和を志向する本来のイスラーム文化を理解してもらいたいという趣旨で、文化研究会を公認サークルにして学内でセミナーなどを行いたいという希望も寄せられている。研究会は学内教員が顧問を引き受けており、文化サークル連盟との連絡を取り始めている。これも宗教活動をするためのグループでなく、開かれたサークルにするよう、そして学生たちが文化について学ぶ場になるよう助言している。実現すれば多くの学生たちにとって非常によい学びの機会となるであろう。

文化は、宗教と密接な関係を持ち、場合によっては宗教が文化の重要な根底をなしている。特定の宗教を信仰する人が少数派とも言える日本では、宗教に対するイメージが様々である。学生たちの多様な文化背景を尊重し配慮するとはどういうことか、人々の感情や価値観を尊重するとはどういうことか、ムスリム学生たちと作る学内の環境は、多くの興味深い課題を含む事項である。

その他にも学内に共存する多様な文化について考え、多文化環境を整えるために知恵と努力を結集したい。

\*1

古城紀雄 1999「大阪大学生協でのハラルフード提供」、『留学生交流・指導研究』、国立大学留学生指導研究協議会

\*2

例えば、集会場の外のエレベーターホールで、集会を終えた多数の人が集まり話し込むことがあり、その光景が異様な感じを与えるという声が聞かれた。そのような公共の場所で大人数が集まって話すことは、音の問題もあるが、光景に慣れていない人が多いことを伝えた。例えばグレースーツをまとった日本人男性ばかりが埋め尽くす会議などは同様に、他の人々から見れば異様であろう。重要なのはそのような違和感等を互いが伝え、知り、理解し配慮する土壌を作ることであろう。認知レベルと感情レベルは必ずしも一致しないことを知り、配慮することが必要である。

### 3. 学部・大学院教育：授業

基礎セミナー（学部一年生）向けの「多文化社会を生きる」は、昨年同様松浦教授が代表となって留学生センター教員チームで受け持ったが、田中は今年度は時間の都合で担当しなかった。後期の教養科目「留学生と日本」は浮葉助教授を代表として松浦・堀江・高木・田中の教員チームで学部2年生および日本語・日本研修留学生の合同授業を担当した。

大学院では、国際言語文化研究科での「異文化接触とコミュニケーション」の授業3年目を通年で担当した。JAFSA 研究助成金を得て、昨年度の授業後有志で編集した冊子を完成させた。（授業については別途報告する。）

### 4. 地域連携：学外講演、文化交流

大学と地域の連携、大学の地域貢献の重要性は益々増大している。日本学生支援機構で昨年度開始した「留学生地域交流事業」の2年目が進み、留学生センター松浦教授が企画委員長として、田中は企画委員として事業に参加してきた。複数の児童養護施設を留学生たちと共に訪問し、充実した時間を過ごした。同じような年代の子どもを持つ母親として、施設の子どもたちのおかれた家庭環境を非常に重く受け取ってきた。同時に、施設の環境の中で大人たちに守られながら集団遊びをする子どもたちと一緒にいると、家庭にいる子どもたちはこのような経験ができるのだろうか、という疑問も湧いてくる。3年計画の事業に継続して関わっていくのは休日出勤もあってたいへんではあるが、人間として、また教員として、非常によい学びの機会となっている。

学外で生涯学習センターを中心として進めてきた市民向けの講座を、今年度も一部を留学生センターとの「連携講座」として行ない、企画段階から関わりながら職務のひとつとして行なった。

- 緑生涯学習センター・名古屋大学留学生センター連携講座「街と心のバリアフリー」
- ・2005年5月30日石川クラウドディア（名古屋大学留学生センター）「バリアフリーの形を探る：国籍を超えて」
- ・2005年6月6日松浦まち子（同上）「バリアフリーの心を探る：留学生相談から」
- ・2005年6月13日田中京子（同上）「共生を探る：留学生との懇談を通して」

### ○国際理解講座への委員・講師

- ・「異文化コミュニケーションの楽しみ方」千種生涯学習センター
  - ・「女性セミナー：外国人から見た日本の男女共同参画」、天白生涯学習センター
  - ・「文化の多様性と接触」、愛知県国際交流協会日本語ボランティアステップアップゼミナール
  - ・「人権講座：多文化理解の視点で」、中川生涯学習センター
- 行事への参加招待、派遣依頼など
- ・2005年6月名古屋大学教育学部附属高等学校から総合学習「生き方・進路を考える」の一環で相談室に高校生1名来訪。田中が対応。
  - ・2005年5月～7月NHK ブレーンズから万博会場での催し「お米でまわる世界一周味紀行」に参加依頼。イタリア出身留学生1名が参加。
  - ・2005年5月～7月民間語学学校からハンガリー語およびモンゴル語教師依頼。それぞれの国籍の留学生が対応。
  - ・2006年2月7日 浄心中学校から中学生3名が来訪「地球の砂漠化について」調べ学習。エジプト出身の大学院生およびその配偶者が対応。
  - ・2006年3月23日 名古屋国際センターから、中東女性・市民団体交流会へ参加依頼。イラン出身の留学生が1名参加。
  - ・2006年2月～3月 民間語学学校からポーランド語およびベトナム語の教師派遣依頼。それぞれの国籍の留学生が対応。

### 5. 学生パートナーシッププログラム（運営、実施状況）

次年度に引き続き、教育交流部門でプログラムの運営を行なった。登録の際には交流目的、趣味、言語（外国語となる場合はそのレベル）などを聞き、できるだけ共通点の多い学生を紹介するよう試みた。また、マッチング対象となる適切な登録者がいなければ紹介が遅れる旨を伝えた。今年度の日本人学生、留学生登録者数、及びマッチング数は次表の通りである。

## ホスト（日本人学生）登録者数

	男性	女性	合計
文学部	1		1
文学研究科		1	1
教育学部		2	2
法学部	1	3(2)	4(2)
経済学部	1(1)	1(1)	2(2)
経済学研究科	1		1
情報文化学部	(1)	1(1)	1(2)
医学部	(1)		(1)
医学部保健学科		2(1)	2(1)
工学部	2(2)	(1)	2(3)
工学研究科	3*(1)		3(1)
生命農学研究科		1	1
その他（職員）		1	1
合計	9(6)	12(6)	21(12)

( )は、2005年度にマッチングした数であり、前年度以前に登録した日本人学生のマッチングも数えた。なお、マッチング数が合致しないのは、1人の留学生に2人の日本人学生をマッチングしたためである。

\* 研究員1名およびホストを申し出た留学生1名

今年度のマッチング数は、前年度の約三分の一になった。これは登録者の目的が「外国語（特に英語）のスキルアップ」を目指すものが多く、登録留学生の母語もしくは使用言語が互いのそれに合わない、言語以外の目的があったとしても使用言語の運用レベル、年齢差などの理由から必ずしも交流の効果が期待できない場合もあり、マッチングをひかえたためである。言語習得を希望する者は、(i)留学が決定した、あるいは将来、留学の希望がある日本人学生、(ii)初級から上級まで各レベルにおいて日本語運用力を高めたい留学生、(iii)英語力を伸ばしたい留学生である。

(i)において習得希望言語の運用能力や確たる動機がほとんどない状態からパートナーを求める場合、留学生はいわゆる「語学講師」ではないこと、プログラムでの交流を幅広くとらえてもらえるよう伝えてきた。また、交換留学をひかえた学生には、留学先となる大学からの短期留学生に登録協力を直接お願いしたこともあった。

(ii)の場合、日本人学生がマッチング対象留学生の言語や文化に興味を持っているか、あるいは使用言語は主に日本語となるが、それでも良いかを予め日本人学生に聞いてから適切な学生を紹介してきた。これは過

## 留学生登録者数

	男性	女性	合計
NUPACE	2(1)	3(2)	5(3)
6ヶ月コース	1(1)		1(1)
1年コース	1	7(2)	8(2)
教育学部	1(1)	1	2(1)
法学部	1(1)		1(1)
法学研究科	1		1
経済学部	1(1)		1(1)
工学部	1(1)	1	2(1)
工学研究科（研究者）		2	2
国際言語文化研究科		2	2
国際開発研究科		1	1
情報科学研究科	1	1(1)	2(1)
留学生センター（研究生）	1	1	2
合計	11(6)	19(5)	30(11)

去に交流の言語手段が日本語だけになることに不満を唱える学生が複数あったためである。

(i)~(iii)のすべてにおいて、適切なパートナーが紹介できないケースは多くあり、その場合、1対1の従来の紹介だけでなく、登録者のニーズを満たす他の機会を提供することを試みた。留学生相談室が企画、実施した「多文化間ディスカッショングループ」や「スモールワールド・コーヒーアワー」、短期留学部門企画による新規渡日 NUPACE 学生向け「ヘルプ・デスク」について、パートナーシッププログラム登録者にも情報提供し、参加を促した。また、日本語による発表の前に資料チェックをして欲しいと相談に来た留学生に、手助けのできる日本人学生登録者を紹介するなど、何かのテーマや作業を一緒にする機会を提供することで、言語習得目的以外の交流意義を見つけ、自発的に交流の輪に加わることを期待した。

## (今後の計画)

パートナーシッププログラムは、留学生と日本人学生の「交流のきっかけ」を提供する目的から始まったが、プログラムの創設から8年経ち、プログラムの役割を見直すため昨年度にパートナー紹介者にアンケートを行なった（紀要4号に報告）。それにより得られ

た意見、提案を踏まえながら、今年度は、登録者自らが選択し持続可能な交流へ発展させることができるよう、プログラム登録者に新たな情報発信を試みた。その結果、ごく僅かではあるが、前述の留学生相談室のプログラム、短期留学部門のヘルプデスクへ参加者があり、それぞれの交流を築いている。今後も1対1の紹介だけではなく、様々なプログラムの情報提供を登録者に発信していきたい。

なお、登録者には、氏名、住所、電話番号、メールアドレス等の個人情報を記入し提出してもらっているが、登録時から変更されている場合があり、パートナー紹介時に事前連絡をしても不通であったり、返事がなかったりする場合がある。そのため半期、もしくは1年に一度は、登録者で未紹介者に対してパートナー登録継続意志があるかどうか、変更事項があるかどうかの確認の案内を出し、整理するようにしている。

## 6. コンピュータ室スーパーバイザー調整

留学生センター内のコンピュータ室のスーパーバイザーとして、所属する学生にコンピュータのシャットダウン、戸締り、建物全体の戸締り、緊急時の連絡等の仕事を依頼した。学生が安全に、責任を持って仕事を行えるよう、相談室でマニュアルを作成し、学生にはチェックリストを提出してもらっている。現在のところ大きな問題はなく、年間を通して毎日夜10時までの開室が実現している。

## 7. 学内委員会

今年度も田中は学内委員会に多くの時間を使った。

日常業務を活かし、また日常業務にも反映できるよう、可能な努力をした。

男女共同参画推進委員会の下にある育児支援ワーキンググループおよび、学内保育所委託業者選定委員会と学内保育園設置準備委員会では、学内保育所設置に向けて様々な作業を行なった。国際貢献型という位置づけの当保育園のために、これまで留学生や外国人研究者たちとの相談活動の中で培った知識や経験を生かせるように努力した。

全学同窓会の幹事として、今年度も広報委員を担当し、ニュースレターの編集に関わった。海外支部が設立されており、海外の同窓生たちとのつながりは全学同窓会の重要課題である。これも日常の活動の糧を還元し、また全学の委員たちと協力作業をする中で自らも学んでいきたい。

上記の同窓会と保育園をつなげて、同窓会支援費で保育園の遊具を設置する申請を出し、それが実現した。名大構成員の子どもたちが、同窓会から寄贈されたログハウスで遊んだ記憶は長く残り、将来につなげられるであろう。

## 8. おわりに

全学の留学生相談室に専任教員が着任し、学生たちの交流と成長をめざした様々な活動を展開しはじめた。頼もしい同僚たちが増え非常に楽しみである。関連機関と益々連携協力しながら、広く深い教育交流に取り組みたい。

今後も着実に、創造的で広がりのある仕事をしながら教育交流に寄与したい。

# ECIS WORKSHOP 2005-2006

## 留学生センター ワークショップ

### 日本社会を楽しもう

名古屋大学とその周辺は、多様な人々の文化の宝庫です。ここで生まれ育った人、いろいろな国から来た人、働いてる人、勉強してる人、一緒に住んでる人、一緒に遊んでる人の存在、共に学びあひましょ。

2005年7月12日

時間: 14:45~16:15 場所: CALE フォーラム (留学生センター/CALE 棟2階)  
「服のお茶で日本を楽しもう」  
講師: 金子孝枝

2005年7月19日

時間: 14:45~16:15 場所: CALE フォーラム (留学生センター/CALE 棟2階)  
「引越し」  
進行: 名古屋大学留学生相談室

名古屋大学全学同窓会 特別講座

2005年10月22日  
時間: 14:00~17:00 場所: 留学生センター/CALE 棟2階 207講義室  
「グローバルに仕事をすると?」討論とワークショップ  
講師: 名古屋大学同窓生

2005年11月1日-2006年2月

時間: 14:45~16:15 場所: 留学生センター/CALE 棟2階 CALE フォーラム  
●11月15日 「地震が来る?」  
講師: 名古屋大学災害対策室

●1月20日 「引越し」

進行: 名古屋大学留学生相談室

●2月 7日 「書道」

講師: 藤井尚美、藤井書道教室

●2月28日 「書物」(日本の伝統衣装)

講師: 加藤かつ子、駒ぎもの学苑

名古屋大学全学同窓会 特別講座

2006年3月14日  
時間: 14:45~16:15 場所: 留学生センター/CALE 棟2階 CALE フォーラム  
「日本のビジネスマナー」  
講師: 山崎直美: Office Bridge 教育研修インストラクター

- ◆参加登録: 事前に参加登録してください! 各セッションの運動前からの登録可能です。
- ◆名古屋大学学生とその家族(8歳以上): 各セッションの運動前からの登録可能です。
- ◆使用言語: 日本語と英語
- ◆各セッションの日本語は、名古屋大学留学生センター場が併設されています
- ◆日時、場所関係する可能性が異なります

★★★★ 通訳 (日本語 ↔ 英語) 募集中 ★★★★★

WORKSHOP 募集先: 名古屋大学留学生センター相談室 204 (田中・524)  
[E-mail] tanaka@ecis.nagoya-u.ac.jp (田中)

コーディネーター: 名古屋大学留学生センター相談室

# ECIS WORKSHOP 2005-2006

## Bridge to Japanese Society

Nagoya University and its region has many people with various cultural backgrounds- some were born and raised here, others came here from different countries for different reasons, such as work and study. Let's enjoy and think about this society where we live together!

**JULY 12, 2005** TIME: 14:45~16:15 PLACE: CALE Forum (2F, ECIS/CALE Bldg.)  
"Let's learn about Japan through a cup of tea"

Lecturer: Ms. Koike EBSU

**JULY 19, 2005** TIME: 14:45~16:15 PLACE: CALE Forum (2F, ECIS/CALE Bldg.)  
"Moving"

Coordinated by: Advisors' Office for International Students, NU

**Special Session supported by NUAL**

**OCTOBER 22, 2005** TIME: 14:00~17:00 PLACE: #207(2F, ECIS/CALE Bldg.)  
What is "Working Globally?"

Discussion & Workshops

Lecturer: Nagoya University Alumni

**NOVEMBER 2005 — FEBRUARY, 2006**

TIME: 14:45~16:15 PLACE: CALE Forum (2F, ECIS/CALE Bldg.)

●November 15 "Earthquake is coming!"

Instructed by: Disaster Management Office of Nagoya Univ.

●January 20 "Moving"

Coordinated by: Advisors' Office for International Students, NU

Lecturer: Ms. Naomi FUJII, Fujii Sho-do School

●February 28 Kimono (Japanese Traditional Costume) "

Lecturer: Ms. Katsuko KATO, Koma Kimono School

**Special Session supported by NUAL**

**MARCH 14, 2006** TIME: 14:45~16:15 PLACE: CALE Forum (2F, ECIS/CALE Bldg.)  
"Japanese Business Protocol"

Instructor: Ms. Naomi YAMAZAKI, Business training instructor, Office Bridge

- ◆REGISTRATION (from 2 weeks before the session): Sign up at ECIS Advisor's Office (#204) NU students & their family (over 18 years old, NU staff members and community people (Some sessions are designed for international students))
- ◆LANGUAGE: English and Japanese
- ◆Detail of each session to be announced on ECIS bulletin boards.
- ◆Date and Place are subject to change.

★★★★ INTERPRETERS (English ↔ Japanese) WANTED ★★★★★

CONTACT:

Tanaka / Fumi, #214 ECIS Advisor's Office, Education Center for International Students  
[TEL] 052-789-5404 [E-mail] tanaka@ecis.nagoya-u.ac.jp (Tanaka)

Coordinated by: ECIS Advisor's Office